

很好的人！素晴らしい人！

K中に勤めていた時、年度途中に中国から転入生がやってきました。日本語は全く話せません。翻訳サイトを通して、彼とはある程度のコミュニケーションはとれましたが、授業では配慮らしい配慮ができませんでした。彼はわからない言語が飛び交う授業に入り、静かに座っていました。

そんな彼が、私の国語の授業で一枚の写真を見ていきなり立ち上がり、中国語で叫びました。

「很好的人！」

いきなりの中に、他の生徒たちはびっくり！発言できるはずがないと黙っていた彼の言動に、生徒たちも私も目を丸くしていました。

私が提示したのは、中国の小説家魯迅（ろじん）の写真です。ちょうど小説教材『故郷』に入っていた時でしたので、毎時間黒板の片隅に彼の写真を掲げていたのです。

授業後、転入生の彼と話しました。すると彼は、魯迅の作品は知らないが、中国を救った素晴らしい人だということを知っていると話しました。魯迅は小説家というより、英雄なのでしょうね。作品から魯迅を知ったのではなく、歴史や生活の中で魯迅の存在が彼に焼き付いたのだと私は思いました。

本日の授業巡視では、三年C組に居座ってしまいました。なぜなら、国語の授業で『故郷』を扱っていたからです。授業者の丁寧な授業展開に、生徒たちはひたむきに取り組みんでいました。

さすが三年生です。彼らのノートに書かれたことを見たり発言を聞いたりしていると、作品の奥深さに迫れるだけの力を生徒たちは十分持っているとわかりました。ぜひともそれを駆使して、小説『故郷』にこだまする魯迅の叫びに迫ってほしいと思います。

中学、いや、義務教育最後の小説教材として位置付けている『故郷』は、日本にはない類（たぐい）の小説です。医者になるために日本で勉強していた魯迅が、その夢を捨てて小説家に転身して書いた作品です。彼は「医学では人の心は変えられない」と、「メス」ではなく「ペン」を執りました。人生や命を懸（か）けて書いていると言ってもよいでしょう。「先生、魯迅ってすごいですね。『故郷』って暗い話でいやだなあと黙っていました。魯迅の思いは明るい方を目指していたんですね。魯迅のほかの作品も読んでみます。」

『故郷』の学習が終わった時、ある生徒が私に近づいてきてこう言いました。最高にうれしい言葉でした。授業の準備は大変でしたが、このときほど「やっていてよかった」と思ったことはありませんでした。

（十月二十二日 記）